

消費者委員会新開発食品調査部会  
(第14回)  
議事録

# 消費者委員会新開発食品調査部会（第14回） 議事次第

1. 日時 平成25年8月26日（月） 14:00～15:30

2. 場所 消費者委員会大会議室1

3. 出席者

**【委員】**

石綿委員、大野委員、川戸委員、久代委員、栗山委員、古野委員、清水委員、  
田島委員、手島委員、寺本委員、戸部委員、中村委員、山崎委員、山田委員

**【説明者】**

消費者庁 食品表示企画課

**【事務局】**

原事務局長、小田審議官、新開発食品担当

4. 議事

(1) 開 会

(2) 特定保健用食品の表示許可に係る調査審議

**【新規諮問品目（5品目）】**

- 1) いつもの烏龍茶（株式会社伊藤園）
- 2) いつもの緑茶（株式会社伊藤園）
- 3) スタイリースパークリング350ml（株式会社伊藤園）
- 4) □□□（サッポロビール株式会社）
- 5) □□□（花王株式会社）

(3) 特定保健用食品の表示許可品目に係る報告（規格基準型・再許可）

(4) その他

(5) 閉 会

## 《 1. 開会 》

○原事務局長 それでは、お一方おくれておられる委員がいらっしゃいますけれども、時間もまいりましたので、始めさせていただきますと思います。

本日は、皆様、お忙しいところをお集まりいただき、ありがとうございます。

ただいまから、「消費者委員会新開発食品調査部会」の第14回の会合を開催いたします。

本日も参考人といたしまして、独立行政法人国立健康・栄養研究所から、食品栄養表示研究室長の山内先生に御出席をいただいております。

新製品の説明につきましては、消費者庁食品表示企画課からお願いをしたいと思います。

それでは、配付資料の確認をさせていただきますと思います。

お手元です。議事次第の下に配付資料一覧をつけておりますけれども、資料1といたしまして新製品の概要資料、資料2といたしまして調査部会の報告書の案、資料3といたしまして答申書、資料4といたしまして報告案件の一覧表、資料5といたしまして、特保の広告審査会の概要、参考資料といたしまして本日付けの特定保健用食品の一覧表の最新版をおつけしております。

また、後ろのテーブルに各品目の審査申請書などの審議資料を御用意しておりますので、適宜ごらんいただければと思います。

不足の資料がございましたら、途中でお申し出ください。

なお、配付資料や審議内容については、公開を前提としていない情報も含まれておりますから、お取り扱いには御注意いただきますようお願いいたします。

では、田島部会長委員、議事進行をよろしくをお願いいたします。

---

## 《 2. 特定保健用食品の表示許可に係る調査審議 》

○田島部会長 では、審議に入る前に、本日の審議品目に関して、申し合わせに基づく寄附金等の受け取りの有無と、申請資料に対する委員の関与について確認しておきたいと思っております。

事務局から説明をお願いいたします。

○事務局申し合わせに基づいて、今回の審議品目の申請者からの寄附金等の受け取りについて事前に確認させていただいたところ、審議に御参加いただけない委員はいらっしゃいませんでした。また、申請書に対する関与についても該当する委員はいらっしゃいませんでした。

報告は以上です。

○田島部会長 ありがとうございます。

今の御説明について御質問等はございますでしょうか。

それでは、議事に入りたいと思います。

---

(1) いつもの烏龍茶

(2) いつもの緑茶

○田島部会長 議事次第2、新規諮問品目でございます。5件ございますが、まず初めに、新規諮問品目の株式会社伊藤園「いつもの烏龍茶」「いつもの緑茶」でございます。

では、まず、消費者庁から御説明をお願いいたします。資料は後ろのテーブルに用意されております。

○食品表示企画課 資料1の1ページをお開きください。

こちらは、商品名は「いつもの烏龍茶」。申請者は、株式会社伊藤園です。

保健の用途といたしましては、本品は茶カテキンを含みますので、体脂肪が気になる方に適しています、となっております。

関与成分といたしましては、茶カテキンとなっております。

1日摂取目安量当たりの関与成分量としては、394mgとなっております。

1日当たりの摂取目安量は、1日2本、食事の際に1本を目安にお飲みください、となっております。

摂取をする上での注意事項は、多量に摂取することにより、疾病が治癒したり、より健康が増進するものではありません、となっております。

食品形態は、清涼飲料水となっております。

資料1の5ページ目の対比表をごらんください。

本品目については、許可番号1206番カテキン緑茶プラスと関与成分1日摂取目安量当たりの関与成分量許可表示が同じとなっております。

相違点としては、カテキン緑茶プラスは、容量が350mlですが、今回申請された2品目、この後に説明いたします「いつもの緑茶」もあわせ、どちらも男性を中心に、容量の多いものが望まれていたという理由から、容量は500mlとなっております。

以上が「いつもの烏龍茶」の説明でございます。

つづきまして「いつもの緑茶」について、資料1の11ページです。概要は同じですので、あわせて御審議のほど、よろしくをお願いいたします。

○田島部会長 ありがとうございます。

2品目、どちらも既許可品と同じ関与成分、カテキンでございます。容量をふやしたということだけでございますので、余り問題はないと思いますが、お手元にパッケージの見本もございますので、それをごらんになりながら、御議論のほど、よろしくをお願いいたし

ます。

寺本委員。

○寺本委員 第一調査会のほうの議論だけお話しいたしますけれども、先生方のお手元の後ろのほうにあるあれをごらんになりますと、これは、特級烏龍茶とか特級緑茶という名前を用いていたということで、これはちょっとまずかろうということで、それを差し戻したということと、それから、500ml が男性で好まれているというふうに断言されていたわけですが、その根拠として何かないか。本当にそうなのかというあたりで、もう一回、皆さんにアンケートをとって調べていただいたということで、一応その中では、多くの方が500mlを希望されていたということをもって、一応オッケーとしたわけですが、結局、500mlを食事のときに一遍に飲むということが本当に可能なのかどうなのかということと、350と500があれば、どっちがいいかと言われれば、500mlと答えるのが一般的だろうというアンケートの取り方にも若干問題があるのではないかということだったのですが、一応そこまでされていたということで、第一調査会では、一応作用機序としては問題ないということなので、いいのではないかかという話になったという経緯がございます。

○田島部会長 どうも御説明ありがとうございました。

ほか、ございますでしょうか。

戸部委員。

○戸部委員 今の説明いただいたことについて、確認なのですが、第一調査会のところの指摘事項で、500mlが望まれているかどうかということの確認をということなのですが、この回答として、購入したい容量はどれですかと聞かれているのですが、本来であれば、ここは「どのくらい飲みますか」ということを聞かないと、購入意向というのはちょっとずれているのではないかなと思います。なので、例えばどのくらい飲みますかといったところで、少なく飲むのであれば、その関与成分が規定量飲めないとか、あるいは、こんなことはないのかもしれませんが、多く実態は飲んでいるのであれば、過剰摂取にならないとか、そういう視点での議論が必要だと思うので、購入意向を聞くというのは何かちょっとずれているような気がします。

○寺本委員 第一調査会でも結局そういう議論になったのですが、一応こちらの要求したことに對して、答えてきていて、回答としてもそうなっているということで認めておりますけれども、恐らくこれは、いつも話題になっていることですが、実態として本当に500ml飲めるのかとか、500ml、実際に飲んでいるのかとかというあたりを調査しなければいけないという、ちょっと次元の違う話になってくるので、そこはまたちょっと別で考えましょうかということになって、やり方としては、本当ならば、おっしゃるとおりで、500mlと350mlだったらどっちがいいですかといわれれば、500mlのほうが得するような感じがするのでいいという、当然そういうことになるので、これを効かせたいと思ったときに飲みたい量はどれくらいかという聞き方とか、アンケートのとり方によって多少

変わるだろうということは議論されましたけれども、一応効果のあるものをある程度の希望されている方のデータもあわせて出してきたということで、その点は一応認めようかという話になったという、非常に弱い肯定論であったことは確かです。

○田島部会長 ほか、ございますか。

今まで承認したものでも、本当にどれだけ実際に摂っているかというのはわからないですね。購入したやつからたくさん摂ってしまう人もいるし、少量しか摂らない人もいるし、それは、正直言ってフォローできない。仕方ないという、限界があるということですね。

栗山委員。

○栗山委員 今、部会長のおっしゃったこともわかるのですが、済みません、毎度同じことで。やはり実態に沿ってどうなのかということも、消費者庁なので、ぜひ、消費者はどういう行動をとるのかということも含めて、含めてというか、それ込みで認可する、しない、この形状がいい、悪いというのを御議論いただきたいなと思います。

○田島部会長 ありがとうございます。

作用機序だとかいうものについては全く問題はないということで、500ml というものの根拠があやふやじゃないかというような御議論でございます。

どうぞ。

○栗山委員 もちろん大勢の人に当たれば、ある程度の数は出てくると思うのですよね。20人、30人ではなくて、もうちょっとの数でそれは出てくると思うし、かといって、がぶ飲みする人もいれば、ほとんど飲まない方もいらっしゃるの、一概にどうこう言うのは、重ねて言うのも気が引けるのですが、やはり私たち普通の感覚から言うと、お食事時に500ml、要するに、大きなコップに2杯半というのは、かなり違和感があります。

○田島部会長 ほか、どうでしょうか。

どうぞ、山崎先生。

○山崎委員 難消化性デキストリンの作用メカニズムを考えますと、消化管の中で難消化性デキストリンにいろいろな栄養成分を吸着させるということなので、量が少々減れば、吸着量が減るよというだけで、効くか効かないかの、イエスかノーかの作用のメカニズムではないのです。それを考えると、飲む量が少々減ったからといって効かないというわけではないです。あとは、食事としてどういう成分の食事をどれだけ摂取したかによって、そもそも所定量の難消化性デキストリンで全部吸着されるかどうかという保証もないわけです。そういう意味で、摂取量に関しては、この関与成分の食品に関しては余りガチガチに考える必要はないと私は思います。

○田島部会長 ありがとうございます。

ほかに御意見ございますか。

寺本委員。

○寺本委員 これは委員会のときの議論とちょっと離れて、私見みたいなものなのですが、私も今の御意見に非常に似ていて、ある程度そういう作用を持っているものをき

ちゃんと出そうとすると、こういう飲み方をすればきちんと出ますよと、実験的にやっているわけですね。これはお薬もみんなそうなのですから、みんなが毎日朝1回飲めば確実に効くという薬が、それでは、みんなが毎日1回飲んでいてかという、必ずしもそうではないわけですが、そうは言いながら、それでも効いている。ある程度は効くわけですね。ですから、そういうポテンシャルを持っている物質であるということは一応認めてもよろしいのではないかなという気がするのです、実態として残りそれが500mlになって、そのうちの100mlか200mlは残しちゃうよといっても、それはそんなに問題ではないのかなという気は私もしているのです。

ただ、結局、問題は、これから全部認めていくときに、ほとんどの方がそこまで飲んでいなくてというようなものを出してくると、これは問題になるので、実験のやり方を考えてなくてはいけないので、そこら辺のところは今後検討する余地があるのではないかなと私は思っております。

○田島部会長 ありがとうございます。

500ml、若者だったら普通に飲んでしまう量でございますが、お年寄りだと、500mlはなかなか一変の食事では飲まないという。だけれども、300ml ぐらいは飲むと。そうすれば、保健の効果というのが、効き方が少しはよくなっても、効いていることには違いがないというので、承認しても別に問題はないのではないかと、そういった御意見が強いようでございますから、よろしゅうございますか。

(「異議なし」と声あり)

○田島部会長 それでは、御議論はございましたが、「いつもの烏龍茶」「いつもの緑茶」については、本部会で御承認をしたということにさせていただきます。

ありがとうございます。

---

### (3) スタイリースパークリング 350ml

○田島部会長 続きまして、株式会社伊藤園の「スタイリースパークリング 350ml」でございます。これも後ろに資料がございます。

御説明は消費者庁からお願いいたします。

○食品表示企画課 資料1の21ページをお開きください。

商品名は「スタイリースパークリング 350ml」。申請者は株式会社伊藤園です。

保健の用途といたしましては、本品は、血中の中性脂肪を減らす作用のあるモノグリコシルヘスペリジンを含んでおり、中性脂肪が高めの方や、脂肪の多い食事をとりがちな方に適しています、となっております。

関与成分といたしましては、モノグリコシルヘスペリジンとなっております。

1日摂取目安量当たりの関与成分量としては、340mgとなっております。

1日当たりの摂取目安量は、1日1回、1本を目安にお飲みくださいとなっております。

摂取をする上での注意事項は、多量に摂取することにより、疾病が治癒したり、より健康が増進するものではありません、となっております。

食品形態は、炭酸飲料となっております。

本品は、申請者の既許可品「スタイリースパークリング」、許可番号第1340号、許可日、平成24年4月17日と関与成分が同じである類似品です。

1日摂取目安量当たりの関与成分量は同じですが、1日摂取目安量が、既許可品が500mlに対し、申請品は350mlでございます。

以上でございます。

御審議のほど、よろしくお願いいたします。

○田島部会長 ありがとうございます。

つい先日承認いたしましたモノグリコシルヘスペリジンについての商品形態が違うものの申請でございます。これは、先ほどと違って350mlと減らして申請を出してきたものでございます。

御審議のほど、よろしくお願いいたします。

これも第一調査会で。何か御発言。

○寺本委員 これはほとんど議論がございませんで、先ほどとは逆の話で、飲む量としては少なくなっているのですけれども、中身は全く同じなので、余り調査会のほうで議論もなく許可したということです。

○田島部会長 御報告ありがとうございます。

表示見本がございいますが、何か気になる点、ございますでしょうか。

よろしゅうございますか。

(「異議なし」と声あり)

○田島部会長 それでは、「スタイリースパークリング 350ml」、伊藤園から申請がございましたものについては、本部会で承認することにさせていただきます。

---

(4) □□□

(5) □□□

○田島部会長 続きまして、規格基準型でございます。

本来でしたら、規格基準型ですので、消費者庁のほうで判断いたしまして、承認という手続をとらせていただくのですが、この品目、表示見本を見ておわかりのとおり、いわゆるアルコール飲料を連想させるパッケージでございます。そういうことで消費者庁のほう



から、規格基準ではありますが、この部会での審議をお願いしたいということで上がってきたものでございます。サッポロビール株式会社の「□□□」と花王株式会社の「□□□」でございます。

では、まず、消費者庁から御説明をお願いいたします。

○食品表示企画課 今、部会長からも御説明がありましたけれども、いわゆるノンアルコールビールのタイプのもの2つ、このうち「□□□」のほうは、清涼飲料水と割り切れば、規格基準型として消費者委員会の審議を経ないで許可をすることも可能とも判断できるものでありますけれども、庁内でも議論した結果、通常の清涼飲料水と同様に飲まれるのかといったところなどの論点もありますし、そういったことも含めて御議論いただければということで、もう一方の「□□□」とともに、消費者委員会のほうの御議論をお願いしたものであります。

内容は事務方から説明いたします。

○食品表示企画課 それでは、資料1の35ページをお開きください。

商品名は「□□□」。申請者はサッポロビール株式会社です。

申請の区分は、特定保健用食品（規格基準型）となっております。

保健の用途といたしましては、食物繊維（難消化性デキストリン）の働きにより糖の吸収を穏やかにするので、食後の血糖値が気になる方に適しています、となっております。

関与成分といたしましては、難消化性デキストリンとなっております。

1日摂取目安量当たりの関与成分量としては、食物繊維として4gとなっております。

1日当たりの摂取目安量は、お食事の際に1缶 350ml、1日1回を目安にお飲みください、となっております。

摂取をする上での注意事項は、血糖値に異常を指摘された方や、糖尿病の治療を受けておられる方は、事前に医師などの専門家に御相談の上、お召し上がりください。とり過ぎ、あるいは体質、体調により、おなかの緩くなることがあります。多量摂取により、疾病が治癒したり、より健康が増進するものではありません、となっております。

食品形態は、清涼飲料水となっております。

続きまして、「□□□」の説明をさせていただきたいと思っております。

資料1の38ページをお開きください。

商品名は「□□□」。申請者は花王株式会社です。

保健の用途といたしましては、本品は、茶カテキンを豊富に含んでおり、エネルギーとして脂肪を消費しやすくなるので、体脂肪が気になる方に適しています、となっております。

関与成分といたしましては、茶カテキンとなっております。

1日摂取目安量当たりの関与成分量としては、540mgとなっております。

1日当たりの摂取目安量は、1本を目安にお飲みください、となっております。

食品形態は、清涼飲料水となっております。

本品は、通常の特典保健用食品の申請でございますが、先ほどの「□□□」と同様に、ノンアルコールビールでございます。

説明は以上でございます。御審議のほど、よろしくお願いいたします。

○田島部会長 ありがとうございます。

先ほど私、説明をちょっと間違えました。規格基準型のものは「□□□」だけでございます。花王の「□□□」、これは茶カテキンですので、規格基準型ではございません。「□□□」はデキストリンですので、規格基準型という話でございます。

パッケージの見本を見てわかりますとおり、いまはやりのノンアルコール飲料でございます。ということで、御議論をお願いいたします。

まず、事務局から補足説明があるそうです。

○事務局 事務局から補足説明をさせていただいてもよろしいでしょうか。

こちらの、もともとの委員の方は御存じかと思われかもしれませんが、特保にはアルコールは認めないというQ&A集が厚労省から出されております。その上で、こちらのノンアルコールビールの開発のコンセプトですけれども、アルコールを常用している方については、休肝日を設けなさいということで健康増進に役立つだろうという点と、もともとアルコールを医者から止められている方について、これらを飲用することができるだろうというコンセプトで開発をされた経緯があります。

後ろにあります花王から出されている「□□□」の審査申請書をごらんいただきたいと思うのですが、こちらのほうになります。資料ナンバー5-1を開いていただきたいのですが、ねずみ色のドッジファイルになります。

花王の社内報告書として、ビールテイスト飲料の飲用実態ということがまとめられております。

概略を御説明いたしますと、5ページを開いていただきたいのですが、中段3行目「しかしながら」以下ですが、ビールの飲用中止や未成年者でもビール飲料の飲用者が存在していることがわかるというふうな結果が出ております。

それから、6ページから7ページにかけてですけれども、こちらにビールテイスト飲料の10代の使用頻度ということで書いてありますけれども、図5に示すとおり、10代683名において約23%の方がこれを飲んでいる方がいらっしゃるという結果も出ております。

10ページですけれども、まとめに入ってから書いてあるのですが、下から数えて2パラですけれども、②③の結果から、割合は高くないが、妊産婦や未成年もビールテイスト飲料を飲用しているという事実がわかったと。このような事実ということで、事業者の方も、これが未成年者に飲まれているということを十分知っている上で、こちらのほうを開発されたということがよくわかるかと思われま。

こちらのほうに書かれています酒類の広告宣伝及び酒類容器の表示に関する自主基準というのは、後で配付させていただいておりますけれども、こちらの飲酒に関する連絡協議会といいますのは、日本酒造組合中央会、ビール酒造組合、日本洋酒酒造組合等、8団体

で構成されている、アルコールの関係では結構大きい協会団体となります。

これは平成 24 年の改正のときに、ノンアルコール飲料に関しての表示に関する自主基準が新たにつけ加わりました。要約しますと、5 ページになりますけれども、ノンアルコールビールについては、満 20 歳以上の成人の飲用を想定、推奨するものとするということが書かれておまして、次に、6 ページ、上から 5 行目ですけれども、3. ノンアルコール飲料の容器の表示等ということで、製品に以上を対象としている旨を表示する。

既存のアルコール飲料と同一ブランド名及び誤認を招くように、類似する意匠は使用しない。

最後ですけれども、酒類については、小売り業者に対する販売管理研修において、区分陳列、分けて陳列するということと、年齢確認の上、消費者に販売するよう指導されることに鑑み、ノンアルコール飲料についても同様の対応とするというガイドラインが出ております。

最後ですけれども、後で配付しました平成 16 年 5 月 26 日の公正取引委員会から出ています景品表示法の運用状況及び消費者取引の適正化への取り組みということですが、こちらの 5 ページのほうに 2 の (2) というところで、いわゆるノンアルコール飲料の表示の適正化についてということで、最後の段ですけれども、消費者は、アルコール分が全く含有されていない酒類の代替的飲料であると誤認する恐れがある。6 ページになりますけれども、このような状況を踏まえ、ノンアルコール飲料の製造事業者または販売事業者を構成事業者とする事業者団体に対し、消費者の適切な商品選択に関する視点から、構成事業者に対する表示の適正化を指導したという文書が出ております。

特に、未成年者に飲ませることにつきましては、アルコール飲料の将来的に飲む恐れがあるということで、未成年者には飲ませないよということになっているそうです。

一応補足説明させていただきました。

○田島部会長 ありがとうございます。

御説明にありましたように、ノンアルコールビールというものは、ビールを飲んでいる人が休肝日にしたいというようなときに、ノンアルコールビールを選択すると。それはいいのですが、逆に、ビールをまだ飲んでいない未成年が飲んで、そして将来的にビールに手を出してしまうということを誘発する危険性が非常に高いということで、自主基準が設けられていると。そのような自主基準がある現状で、あえて特定保健用食品としてノンアルコール飲料というものを承認することの問題点というものが十分考えられるということで、そこで規格基準なのですが、この部会に御議論がゆだねられたということでございます。

調査会のほうでは、どちらの調査会ですか。御議論は当然あったと思いますけれども。

○寺本委員 議論は、基本的に先ほどの規格基準型に関しては、議論の余地もないし、もう一つの「□□□」のほうも、既許可品と基本的には関与成分は同じですし、量的にもそんなに大きな問題はないので、そこはいいのだけれども、アルコールというのでしょうか、

ビールの形をしているというか、ビールのテイストをしているというものを、今おっしゃったとおりで、特保として認めるというのはいかがなものかと。それは、第一調査会の議論の域を超えているので、やはりこれは親委員会のほうで議論していただかなければならないということで、こちらに出てきたというふうに議論はしています。

ですから、ほとんど議論は、そういう意味で言うと、これはむしろ逆に言うと、第一調査会としては、こういうものを認めるのはいかがなものかという、むしろ否定的な意見が強かったというふうにお考えいただければと思います。

○田島部会長 ありがとうございます。

それでは、御意見よろしく願いいたします。

山田委員。

○山田委員 私も決してビールは嫌いなほうじゃないので、ノンアルコールビールという世界があれば、それはたくさんいろいろな利用があると思います。ただ、飲むのはやはりビールとして皆さん飲んでいてと思います。ただアルコールがないというだけで、考え方としては、食品としてはビールだと思っています。お酒として飲んでいて。気分としてはですね。幾ら難消化性デキストリン、脂肪にどうのとやっても、まず、飲み方として、食事が出る場合に、食事の前に飲むか、後に飲むかという、まず、前に飲むと思います。そういうふうなことを考えると、私は、第二調査会ではこういうのが出なかったからよかったのですけれども、おなかに調子がいいビールということで出れば、きたと思いますが、またありますが、これはやはり幾らノンアルコールという名前をつけながら、連想と同時に、実質的なのはお酒という形で摂取する食品だと私は考えますので、本当のビールの中、あるいは本当のお酒の中に、特保のいろいろな製品を入れてプラスアルファを入れたというのは、別次元の世界ではないかと考えております。ですから、これは個人的な意見ですが、このような食品を特定保健用食品として出すことは、私は反対です。

○田島部会長 ありがとうございます。

ほかの御意見どうぞ。栗山委員。

○栗山委員 私も反対です。何か理由を言わなければいけないのですか。最初に部会長がおっしゃっていらしたように、アルコール飲料のかわりに使うようなものをあえて特保にすること自体に大きな問題があると思います。反対です。

○田島部会長 ありがとうございます。

ほかの先生、いかがでしょうか。

逆に承認してもよろしいよという御意見はございますか。どうぞ、古野委員。

○古野委員 古野です。

これは、誰が見ても、普通、スーパーに売っているノンアルコールビールです。反対です。意見がなかったから、皆さん反対なんだと思っていました。みんなが言わないと、反対が通用しないということがわかりました。

○田島部会長 ありがとうございます。消費者委員の各委員も。

承認をしないという根拠をたずねられる恐れがあるのですね。そのときには、先ほど事務局からありましたけれども、厚生労働省自体の Q&A で、アルコール飲料は特保としては承認しないという Q&A を出していると。それに準じて、このノンアルコール飲料というのも、通念的にアルコール飲料の一分野であるというふうにこの部会では認めて、したがって、アルコール飲料の範疇に入るので、法律の定義は、アルコール飲料というのは、1%以上アルコールを含まなければアルコール飲料ではないですけれども、概念的にアルコール飲料に入るので、厚生労働省自体の Q&A に従って承認をしないといった論点でいきたいなど、私、個人的に思うのですけれども、消費者庁のほう、それで大丈夫ですか。

○食品表示企画課 判断の中身に我々が予断を与えるようなことを言うのはどうかと思いますけれども、ちなみに、Q&A でアルコール飲料が望ましくないとしているのは、Q&A の中で、例えばビール等のアルコール飲料やナトリウム、糖分等を過剰に摂取させることとなる食品は、保健機能食品の表示をすることによって、当該食品が健康の保持増進に資するという一面を強調することになるが、摂取による健康への悪影響も否定できないことから、保健機能食品の表示をすることは望ましくない、というふうに書かれております。

この Q&A を読む限りでは、ここで望ましくないとしている理由は、一方において健康への悪影響も否定できないことからというのが挙げられていて、まさに悩ましいのは、ここをどう整理していくかということだと思います。

○田島部会長 ノンアルコール飲料というものが将来のアルコールの消費量をふやす可能性が否定できないというので、ひいては健康に対して悪影響が出るという論調なのですけれども。

久代委員、どうぞ。

○久代委員 私も反対です。今まで、コーラ、せんべい、しょうゆは、特保食品と対照食品を比較した試験の結果から、選択肢があったほうがいいということで認可されてきましたけれども、ノンアルコールに関しては、私は将来の依存症が心配です。若い人や子供がビールを飲み始めて、そして味になれて、本当のビールに行くというのが懸念されるので、特保食品としてなじまないと考えます。

○田島部会長 ありがとうございます。

それで、健康に対して悪影響があるから、承認はしないといったことにすると。

○寺本委員 私は、これを否定するのに、もうちょっと強い表現にしたほうがいいのではないか。要するに、特保を一体何だと考えているのだというところを議論しないと、これは本当にずるずるいろいろなものが出てくる可能性があって、この前のしょうゆのときもそうだったのですけれども、これは一体どこまで行くのだという話になってくるわけですね。やはりこの辺で一度、特保というのは何であって、あなたたちは一体本当に人の健康のことを考えてつくっているのかというような議論をしないと、ただ単純に、これが今までのルールに合っていないからだめなんだとかいうような話ではなくて、あなたたちは健康のためにもものをつくっているのだということを自覚させるような言い方をしないと、僕

はいけないのではないかと思うので、そこはよろしくお願ひしたいと思います。

○田島部会長 山崎委員。

○山崎委員 私も寺本委員と似たようなことを申し上げたいと思ったのですが、部会長がおっしゃったような理屈ですと、業界は多分納得しないだろうと思ったのですね。1つは、酒類の業界、あるいは流通業界が行っている自主基準を守れば、一応未成年者は飲まないという理屈になるでしょうと。なぜ自主基準を守っていてもビールの予備軍がふえると断言できるのですかと問われたならば、こちらは多分回答ができないと思うのですね。そういうことも踏まえて、行政側がきちんと回答できるようにするには、寺本委員がおっしゃったように、正面から、特保というのはどういう位置づけで考えるので、こういうコンセプトに基づく商品は認められるのだけれども、それから外れるものは認められないという言い方じゃないと、業界は多分納得できないだろうと思います。

では、具体的にどういうふうな論拠を挙げたらいいかというのは、すぐに私も思いつかないです。ここは皆さんで知恵を出し合う必要があるだろうというのが私の意見です。

○田島部会長 ありがとうございます。

これの話を聞いたときに、最初は、申請者に自主的に取り下げてもらったらどうかなどもチラッと考えたのですね。本当に特保というのを個々の商品で健康を増進することにつながるのかと。本当におたくはそう考えているのですかというふうにたずねて、そうすれば、まともな事業者だったら取り下げるのではないかなということを期待して、最初は取り下げをお願いしようかなとも思ったのですけれども、それはどうですか。やはり正面切って、山崎委員、寺本委員がおっしゃったように、こういった類いのものは特保にはなじまないということを消費者委員会で新たなQ&Aをつくるという気持ちで、承認しないというふうに強く言ったほうがよろしいですか。

どうぞ。

○久代委員 この食品の延長、あるいは将来にはアルコールが含まれている飲料があるので、アルコール依存症を増やすことが心配されるので許可すべきではないだろうとの理由でよいのではないかと思います。

○田島部会長 ありがとうございます。

どうぞ。

○川戸部会長代理 山崎委員が、将来的に飲まないかもしれないとおっしゃいましたが、先ほど事務局が説明されたように、資料5-1の7ページのところに、既に飲用経験のある10代が13%いる。それから、健康的な飲み物だと思うかという意識は高くない。やはりこういうものに関して特保というのにつけないほうがいいという理屈は立つのではないかと思います。

○田島部会長 どうぞ。

○山崎委員 私が高校生だったときのことも考えて、皆様方もちょっと考えていただきたいのですが、自分だけでなく周りの高校生を見て、10%ぐらいの人がビールを飲んでい

るのは当たり前だったと思います。今に始まったことではないと思うので、10%ぐらいというのは、むしろ少ないレベルで抑えられていると判断していいと思います。実際の運用が失敗に終わっていると考える必要が私はないと思います。むしろ、日本では、高校生は自主的にお酒を飲まないようなモラルを持っていると考えたほうがいいのではないかと思います。

○田島部会長 ありがとうございます。

手島委員。

○手島委員 やはりこれはアルコール飲料に属するものということで特保になじまないということを、説明をはっきりしたほうがいいかと思ひまして、申請者の方に自主的に取り下げてもらっても、また同様の形態のものが出てくる可能性がありますので、アルコール飲料の形のものとは認めないというふうな形をはっきり示したほうがよろしいのではないかと思います。

○田島部会長 ありがとうございます。

それでは、寺本委員、山崎委員、今の手島委員の御意見に従って、特保としてノンアルコール飲料というのは承認できない部類の食品ですということをこの部会で決定すると。それに対して事業者から反論が出たら、そうしたら、そのときはまた考えると。どうですかね。1つは、やはりアルコール飲料はだめですよ。これはもう言うてあるのですね。だから、ノンアルコール飲料というの、アルコール飲料の入り口にあるという、将来のアルコールの消費量というのをふやしてしまう。そういったので健康を害する恐れがあると、そういった論調でどうですかね。一度文案はどっちがつかうのですか。消費者委員会のほうがつかうのですか、消費者庁のほうがつかうのですか。消費者委員会がつかう。

○事務局 委員会で作ります。

○田島部会長 そうすると、文案については、部会長一任という話ですかね。

それでは、文案につきましては、部会長一任。もちろんメールであらかじめ御連絡はいたします。それで決定いたしまして、事業者には通知するというので、2品目ともこの部会では承認をいたさないということを結論といたしたいと思いますが、いかがでございましょうか。

どうぞ、清水委員。

○清水委員 私も反対でもちろん構わないのですけれども、ノンアルコールビールというのは、それなりに意味のある食品で、ビール、アルコール飲料によって導かれるいろいろな弊害を避けるための手段というか、そういう意味で意味はあると思うので、それ以上そこに何かさらなるアドバンテージを与える必要は何もない。ノンアルコールビールとして売っていただければいいのだと思うので、特保にする必要はないと思いますが、ビールテイストというやつですね。ビールテイストというやつは、要するに、こういう缶じゃなくて、例えば、ごく普通の清涼飲料だったり、牛乳パックだったり、そういうところにビールテイストのものが出てきたときというのは、それはそれでしょうがないのですかね。だ

から、やはりこの自主基準のところにも、既存のアルコール飲料と同一のブランド名及び誤認を招くような類似する意匠を使用しない、とありますけれども、やはりこの形というか、このスタイルというのが一番問題であるという理解でよろしいのでしょうか。

○田島部会長 販売する側にとっても、誤認するようなパッケージじゃないと販売が伸びませんから、自動的に誤認するような商品しか申請には上がってこないと、そういうふうに理解してよろしいのではないかと思います。

どうぞ、中村委員。

○中村委員 先ほど寺本委員がおっしゃったように、特保というのは、本来どういう制度を目指したのかという総説を出されたらどうでしょうか。というのは、ここ数カ月、本質が忘れられたまま、コマーシャリズムに乗った形で特保制度が動いているというのをとても気にしているのです。この問題を私なりに整理するのですが、特保というのは、生活習慣病とか健康のリスクを減少させるのに有効な食品だと一般的には考えられているわけですが、減塩をしたり、今回のようにアルコールを抜くということに関しては、別に特保にしなくても減塩食品をつくれればいいし、ノンアルコール食品をつくれればいいと思うのですね。特保というのは、リスクを減少させるだけではなくて、積極的にリスクを減少させるというのが特保の特徴だと思うのです。

そうすると、積極的にリスクを落とすということを証明するエビデンスを個々に評価しましょうというので、我々は有効性を議論しているのです。先ほど議論があったように、特保にしたものが将来、リスクを形成する誘因となる。つまりリスク形成に加担するような食品を特保として認めるわけにはいかないだろうと思います。従来、特保というのは、リスクリダクション、リスクマネジメントの制度としてあったのです。リスクリダクションではなくて、リスクを誘因させるような食品に関しても特保を拡大すべきではないのです。それが、国が本当に安全で健康に有効であるという食品を認めるあかしになるのではないかなと考えます。

○田島部会長 そもそもが、今振り返ってみると、コーラを承認したときから始まったような気がいたします。コーラについては、この部会で結論を出さずに、親委員会に判断をゆだねたのですけれども、そこでの結論というのが、コーラだからといって承認をしないというわけにはいきませんよという法的判断だったのですね。どうも親委員会にかけると、親委員会は法律の専門家ばかりなので、どうしても法律論で議論が進んでしまう。特保の本質を考えてはなかなか議論できない。ですから、この議論は親委員会には私は出たくないですね。親委員会に出してしまうと、法律論で認めてしまう可能性があるのです。わかりませんが、認めてしまう可能性があるとは私は判断します。それだから、この部会で結論を出したいというふうに思ってお諮りしたわけです。

石綿委員。

○石綿委員 今、中村委員が言われたリスクのことで、そのとおりでだろうと思います。そのために、自主基準のほうでもノンアルコールに対する宣伝その他の禁止事項をずっと挙



げている。これだけの禁止事項を挙げているものに、あえて消費者庁が特保として許可を出す必要はないような感じがします。

以上です。

○田島部会長 ありがとうございます。

いろいろ議論はいたしましたけれども、先ほど結論を申し上げましたとおり、2品目については承認はしないと。その理由については、部会長に一任させていただきたいということで結論を出したいと思います。よろしゅうございますか。

山崎委員。

○山崎委員 具体的な文章は部会長一任でいいのですが、中村委員が言われたような内容とか、寺本委員が言われたような内容とか、そういうものが事業者に伝わるような文章にぜひしていただきたいというのが要望です。

○田島部会長 栗山委員。

○栗山委員 今の具体的な議論とはちょっと違うのですが、私、実は特保を認可した時点ですごく反対していて、どっちかという、特保を認可してごめんなさいと言ってやめたいと思っていたのですね。この委員会を。別に私個人の責任ではないのですが、担当した者として。でも、皆さんも同じような危惧を持っていらしたということを知って、一緒に頑張れるかなと思いました。済みません。よけいなことで。削除して下さって構わないのですけれども、お伝えはしておきたいなと思いました。

○田島部会長 ありがとうございます。

それでは、この辺でよろしゅうございましょうか。

本日の審議品目は以上でございますので、資料2のとおり、審議結果の報告書を作成いたしたい。

○石綿委員 ノンアルコールに限らない一般的な話なのですが、ビタミンCの表示で、私は前からちょっと気になっているのですけれども、ビタミンC、栄養強化剤として添加する場合には用途名を書かなくてもいいということなのですが、茶飲料を初めとして、最近、ビタミンCが入っているものがものすごく多いのですね。それで、恐らくビタミンCを加える本来の目的は酸化防止ではないかと思うのです。カテキンは入っていませんが、サッポロ、ノンアルコールですか、これの表示では、酸化防止剤、ビタミンCというふうに表示してあるのですけれども、茶飲料に関しては、ただビタミンCときり書いていない。この辺は、そのメーカーが、絶対に栄養強化が目的ですと言い切ってしまうとそれまでなのですが、ビタミンCを加えている大部分の目的は、酸化防止効果をねらっているのではないかと思うので、その辺、今後、ビタミンCの表示について、消費者庁かな、特保に関係ありません。一般の食品全体ですけれども、ビタミンCの表示に関して検討していく必要があるのではないかなと感じています。

○田島部会長 おっしゃるとおりなのですね。御承知のように、食品表示法が6月にできまして、2年以内に施行ということで、現在、表示基準をつくっている最中でございます

が、添加物の用途名併記、あるいは一括名表記なんかも、もう一度、多分表示基準を作成していくときには見直すことになると思いますので、食品表示企画課がいらっしゃっていますから、議論していただけたらと思っております。

何かございますか。

○食品表示企画課 一般食品等にも使われる食材を添加物で使うときの書き方、これは非常に悩ましい問題があるわけですが、そういうある程度広い用途があるものについては、最終的には事業者の主観、意図というものが結局判断材料になるところがあります。それで、酸化防止剤として使っているところは酸化防止剤と。酸化防止剤は、用途名併記の添加物ですから、そうやって書くというふうになりますけれども、多分ルールだけを言うと、もちろん酸化防止剤として使うのだったら、酸化防止剤（ビタミンC）と書いてくださいということなのですが、そのときの、じゃ、あなたの意図は酸化防止剤として使ったのですねと言って、そうではありませんと言われたときに、そうだと認定する根拠がないと、それは、酸化防止剤としてあなたは使っているのだから、書き方としておかしいですよというのは、実態から言うとなかなか難しいところがあります。

ただ、こういったものは、要するに、ある程度一般的な食材で、いろいろな用途に使えるものであるから、もちろんそうなのであって、酸化防止剤も保存料も、まさにそのためだけに使われているような物質であれば、当然酸化防止剤なり保存料と書くようになるので、みんながみんな、そういうふうに意図だけで書いたり書かなかったりするわけではないのですけれども、今、お話のようなビタミンCのような事例ですと、最終的にはそこを酸化防止剤として使っているということを何らかの形でこちらが認定できないと、実際にはどういうルールにしてもやや難しいところはあると思いますけれども、多分いろいろな表示を見られていて疑問に思われる、かなりもつともなところで、悩ましい点であることは間違いないと思います。

○田島部会長 ありがとうございます。

どうぞ、大野委員。

○大野委員 全然別のことなのですが、後で事務局に聞いたほうがいいのかと思ったのですが、先ほど清涼飲料水という話が、食品表示企画課からそういう発言があったのであれなのですけれども、もしこれが「□□□」とか「□□□」とか、そういったものが許可された場合には、問題は、重金属の残量とか、その辺の基準、規制が、清涼飲料水として規制されるのか、食品として規制されるのか、医薬品みたいな感じになるのか、どうかと思ったのです。というのは、きょうの上程された「□□□」の原料の中に、鉛が30ppm含まれて、それ以下ですけれども、それが基準値になっているのですね。単位を間違えたのではないかなと思ったら、僕は今、古いのを見ているのであれなのですけれども、これは希釈されても、製品の中にそのまま原料が最大含量まで含まれているとすると、製品の中にもかなりの量が入ってきてしまうのですね。それで、毎日1本ずつ飲んでいると、WHOの摂取基準の60%ぐらいになってしまうのですね。それを越えてしまうぐら

いなのですね。それで、鉛はこれからくるだけではなくて、ほかにもいろいろなものからきますので、そういうときの基準が清涼飲料水として扱われるのだったら、重金属が含まれているので、検出されてはいけないとか、食品だったら、何 mg/cc、グラムまでとか、そういう基準があるので、計算できるのですけれども、この場合どうだったのだろうと、ちょっとわからなかったのが、教えていただければと思ったのです。別にきょうではなくてもいいのですけれども。

○食品表示企画課　ちょっと確認します。

○田島部会長　当然、食品衛生法に清涼飲料水の規格基準というのがございますので、それをクリアしているかどうかというのを消費者庁でもって確認していただくという話ですね。

○戸部委員　製品規格に鉛は検出されないこととなっているので、多分大丈夫かと思いません。

○田島部会長　だから、当然規格基準は守って製造しているということだと思のですが、もちろん消費者庁に確認していただくということです。

○戸部委員　グレーの品質管理の方法のインデックスの製品規格、10 ページのところに「鉛は検出されないこと」という製品規格になっています。黄色の8番の10ページの製品規格に。

○大野委員　全体としてそういうのはどうされるのかと思ったのです。これ自体も非常に気になったのですけれども、30ppm も入ったら大変なことになってしまう。

○山崎委員　大野委員がごらんになったのは、資料1の42ページ、表3だと思うのですが、そうですね。

○大野委員　そうですね。

○山崎委員　これは、「□□□」に配合する□□□抽出物の原料規格です。□□□抽出物というのは食品添加物なので、食品添加物の規格基準なのですね。重金属というのは、鉛そのものの量をはかるのではなくて、硫化物としての沈殿物ではかります。現在の食品添加物公定書では、重金属規格しかありませんので、検出方法の感度の限界から、大体10～30ppm ぐらいの規格値を設定しているものがほとんどです。ということなので、この規格値上限値ぐらいの鉛が実際に入っていたら大変なのですが、これ以下のものは現在の規格試験法では実際上検出できないので、こういう高い値になっています。現在検討している食品添加物公定書の第9版では、原子吸光法で鉛をはかる方法に変更する予定ですので、そうなりますと、規格値が国際基準レベルの数 ppm という値に下がります。

○大野委員　ほかの製品など、これよりもっとずっと少ない基準値になっていたのです。なぜこれだけそうになっているのだろうと。

○山崎委員　これはあくまで食品添加物の規格だからです。食品としての最終製品の規格じゃない。それです。

○大野委員　わかりました。いずれにしても、最終の製品には入ってこないのだというこ

とで。どこかで、特保が食品になるのか、清涼飲料水として規制するのか、はっきりしておいたほうがいいのではないかなと思いました。

○田島部会長 今、山崎委員からも説明があったとおり、42 ページにございますように、原材料の規格基準であって、製品の規格基準ではありませんと。製品の規格基準は、戸部委員が御指摘になったとおり、検出されないこととなっているので、当該製品に鉛が入ってくる恐れというものはありませんと、そういった御説明でよろしゅうございますか。

○大野委員 ありがとうございます。

○田島部会長 ですので、消費者庁のほう、調べる必要はございません。

ほか、ございますか。大丈夫ですか。よろしいですか。

---

#### 《 報告書案、答申書案の確認 》

○田島部会長 それでは、資料 2 で報告書を確認したいと思います。

河上正二委員長宛てで部会長名でございます。

「新開発食品調査部会報告書。

以下の品目について審議し、別記のとおり議決したので報告します。

いつもの烏龍茶（平成 25 年 1 月 31 日付け消食表第 9 号により諮問）。

いつもの緑茶（平成 25 年 1 月 31 日付け消食表第 9 号により諮問）。

スタイリースパークリング 350ml(平成 25 年 7 月 25 日付け消食表第 206 号により諮問)。」

この 3 品でございます。

下の 2 品については削除させていただきます。

別記については省略させていただきます。

本報告書につきまして、御意見等ございますでしょうか。

（「異議なし」と声あり）

○田島部会長 それでは、御承認いただいたものとさせていただきます。

本日、部会で議決した内容につきましては、新開発食品調査部会設置運営規程第 8 条に基づき、消費者委員会委員長の同意を得て委員会の議決となります。その上で内閣総理大臣へ答申を行うこととなりますが、答申書（案）について、資料 3 でございます。事務局から確認をお願いいたします。

○事務局 答申書につきまして、確認させていただきます。

「 内閣総理大臣宛て。消費者委員会委員長名でございます。

答申書。平成 25 年 1 月 31 日付け消食表第 9 号及び平成 25 年 7 月 25 日付け消食表第 206 号をもって諮問された品目のうち、別添記載の品目の安全性及び効果の審査について、下記のとおり答申します。

記。

平成 25 年 1 月 31 日付け消食表第 9 号をもって諮問された「いつもの烏龍茶」「いつもの緑茶」及び平成 25 年 7 月 25 日付け消食表第 206 号をもって諮問された「スタイリースパークリング 350ml」について、その安全性及び効果につき審査を行った結果、特定保健用食品として認めることとして差し支えない。」

以上でございます。

別添は省略させていただきます。

○田島部会長 ありがとうございます。

答申書（案）につきまして、御意見ございますでしょうか。

（「異議なし」と声あり）

○田島部会長 それでは、このとおりとさせていただきます。

---

### 《 3. 特定保健用食品の表示許可品目に係る報告（規格基準型・再許可） 》

○田島部会長 それでは、議題を進みまして、報告案件でございます。

お手元の資料 4 になります。御説明を消費者庁のほうからよろしく願いいたします。

○食品表示企画課 それでは、前回の消費者委員会新開発食品調査部会以降に許可した規格基準型及び再許可品の報告いたします。

資料は、先ほど部会長がおっしゃられました資料 4 です。

7 月 16 日及び 8 月 23 日に許可した品目のうち、規格基準型及び再許可等の許可は 11 品目でございます。

1 番目。申請者は株式会社エルビー。商品名は「ポリフェノール烏龍茶」でございます。許可番号は 1304 号「ポリフェノール茶」の再許可品でございます。相違点は、申請者と商品名です。

2 番目。申請者は株式会社東洋新薬。商品名が「宇治茶入りよもぎ茶」でございます。こちらは、許可番号 899 号「よもぎ生活」の再許可品になります。相違点は商品名でございます。

3 番目から 6 番目。申請者は同じく株式会社東洋新薬。商品名は「緑茶で食物繊維」「おいしい緑茶」「食物繊維の烏龍茶」「おいしい烏龍茶」です。難消化性デキストリンを関与成分とし、糖の吸収を穏やかにする旨の特定の保健の用途とする規格基準型の特定保健用食品でございます。

7 番目。申請者は、株式会社ヤクルト本社。商品名は「黒酢ドリンク」です。ガラクトオリゴ糖を関与成分とし、おなかの調子を整える旨を特定の保健の用途とする規格基準型の特定保健用食品です。

8 番目。申請者はモンデリース・ジャパン株式会社。商品名は「リカルデント シトラスミント」です。こちらは、許可番号 888 号「リカルデント グレープフルーツミント」の再許可品です。相違点は、商品名です。

9 番目と 10 番目。申請者は株式会社ヤクルト本社。商品名は「New ヤクルト」及び「ヤクルト Ace」です。それぞれ許可番号 300 号「ヤクルト 200」、許可番号 208 号「ヤクルト 80AceLT」の再許可品です。相違点は、商品名です。

11 番目。申請者はサントリー食品インターナショナル株式会社。商品名は「ボス グリーン」です。許可番号 1390 号「オリゴプラスコーヒー」の再許可品です。相違点は、申請者と商品名です。

報告品目は以上でございます。

○田島部会長 ありがとうございます。

規格基準型と再許可のものでございますが、再許可のものは、いずれも商品名の変更ということでございます。

御意見ございますでしょうか。

それでは、報告案件でございますので、御報告を承りましたということでございます。

---

#### 《 4. その他 》

○田島部会長 議題、その他でございますが、本年 1 月に、特定保健用食品について消費者委員会からの声明を発出し、日本健康・栄養食品協会へ広告について審査する機関を設置するなど、自主的な努力を払っていただくことをお願いいたしました。その結果につきまして、事務局から御報告をお願いいたします。

○事務局 1 月 29 日に部会長と委員長の連名で、日本健康・栄養食品協会に対して、過度な宣伝広告は自粛することということで、遵守状況を審査するための機関を設置するとともに、実効性を高めるための引き続き自主的な努力を払っていただきたいという声明を出しております。それについて、日健栄より現状について御報告がありましたので、簡単な御説明をさせていただきたいと思っております。

資料 5 をごらんください。

声明発出から 2 カ月後に、特保広告審査会、特保広告部会を協会の中に設置していただきました。翌 2 週間後、17 日には総会、約 17 社ほど参加して、こちらのほうも設置していただきました。

飛びますけれども、今週やっと予備審査のほうが始まるということです。

第 1 回目の特保広告審査会が 10 月 10 日を予定されまして、ここで過度な宣伝広告とは何かということが明らかになるかと思われまます。

1枚めくっていただきまして、広告審査会の運営概要ですけれども、対象としましては、特保の広告全てです。素材は、TV、新聞、雑誌などです。

また1枚めくっていただきまして、委員につきましては、協会とは別に第三者委員を入れまして、その座長には林次長、公益社団法人JAROからの方が就任されているということです。

また改めて、10月を過ぎましたら、この場でどういう状況になっているかというのを御説明させていただきたいと思います。

簡単ではありますが、以上です。

○田島部会長 ありがとうございます。

以上の報告につきまして、御質問ございますでしょうか。

どうぞ、大野委員。

○大野委員 実は先日、箱根へ行きまして、帰りにロマンスカーに乗ったのですが、ロマンスカーに、新幹線に乗っているようなパンフレットが乗っていたのですね。それをパラパラと見ていたら、核酸が入っている製品で、痴呆の進行をおくらせるというようなことが1ページ、フルに書いてあるのがあったのですね。そういったものはこの宣伝の規制の対象にならないのですか。雑誌でもない、テレビでもない。

○田島部会長 消費者庁、わかりますか。

○食品表示企画課 いろいろな局面があります。今、お話があったのは、まさに特定保健用食品の話なので。

○大野委員 特定保健用食品じゃなくて。

○食品表示企画課 特定保健用食品以外のもので、一般の広告などについては、1つは薬事法の規制がかかります。それと、健康増進法もかかりますし、景品表示法もかかわって、その部分は、不当表示というか、虚偽であれば、規制の対象になるというところですが。ただ、どういうものかというのを見ていないのであれですけれども、いずれも、具体的な商品とのリンクというか、つながりがないと、これは多分なかなか、今申し上げたような法規制の対象には基本的にはならないと思います。

○大野委員 実際に商品に関係して書いてあるのですけれども、宣伝で。送らせていただきます。ちょっと見ていただければと思います。

○田島部会長 消費者庁のほうで見ていただいて、景表法違反になるか、薬事法違反になるか、健康増進法違反になるかというのを一度ごらんになっていただいでください。

ほか、ございますでしょうか。

---

《 5. 閉会 》

○田島部会長 それでは、本日の議事は以上でございます。

事務局から連絡事項などございますでしょうか。

○事務局 本日も審議ありがとうございました。

委員の皆様におかれましては御承知のことと思いますが、委員の任期、2年ということで、一応この8月末となっております。本日の部会が今回の任期としては最後の部会の開催となりました。委員の皆様には毎回大部の資料を御確認いただくなど、お手数、御尽力いただきまして、ありがとうございました。事務局、消費者庁ともども、感謝申し上げます。

お願いなのですが、お手元に資料があるかと思いますが、9月末ごろまでに事務局宛てにお戻しいただければと思います。

事務局からは以上でございます。

本当に活発な御意見どうもありがとうございました。

○田島部会長 それでは、本日の審議はこれにて閉会とさせていただきます。どうもありがとうございました。